

「存亡の危機」を生きる。 2020

1ヶ月以上も続いたでしょうか・・・
来る日も来る日も雨。
「コロナ禍」の只中で、
気持ちが落ち込む日々が続きました。

誰もが「マサカ・・・」と思ったでしょうが、春先からの異常事態に我がいせフィルムも翻弄され「存亡の危機」が続いています。

三月以降に予定されていた自主上映が全滅、収入のメドが立たない状態のまま、ここまで来ました。小なりと言えども個人プロダクションとして製作・配給を自主製作・自主上映という独自の方法で展開してきましたが・・・

映画関係にかかわらず、あらゆる業態で「存亡の危機」は続いているわけですから泣き言は言いたくありません。ここまでも「一輪車操業」と称して、ギリギリの経営状態で映画創りに取り組んで来たのだから、今までだって「存亡の危機」だったわけだしね。

そんな重い気持ちを抱えながら、7月末に予定されていた、東京・日比谷図書文化館と相模原での自主上映に取り組んだ。東京での感染者が増え続ける中で、上映するかどうか、最後まで悩みながらの決断だった。

7月25日（土）、日比谷図書文化館のホールで、3月に予定されていて延期した毎日映画コンクール受賞記念上映会のリベンジ上映。『奈緒ちゃん』と『えんとこの歌』の受賞作二本を上映した。お客さんは2回の上映で15人程。しかし、スコブル内容の濃い上映会になったと思う。『奈緒ちゃん』上映後には、奈緒ちゃんのお母さんと私のトーク。

『えんとこの歌』上映後には、この25年来、私の作品を上映し続けてくれている藤崎和喜さん（小岩メイシネマ）と、飯田光代さん（世田谷 優れたドキュメンタリー映画を観る会・ピカフィルム）が、いせ映画を観せてきた側から語り合ってくれた。必ずトークをやることで、映画を深める、という、いせフィルムならではの上映会になったと思う。

7月26日（日）は相模大野にある相模女子大ホールでの『えんとこの歌』上映会。コロナの影響で延期され、三度目の正直で実現したリベンジ上映だ。

『えんとこの歌』製作のキッカケのひとつでもあった、相模原での障がい者大量殺傷事件から4年目のこの日、夜7時からの上映会に50人程の方々が足を運んでくれた。いつもに増して、緊張感のある雰囲気です。上映とトークを受け止めてくれて、30冊程用意したパンフレットが完売した。ああ、自主上映はいいなあ・・・と思いながら、独り酒をして帰った。

今大変なのは自分だけじゃない・・・
もっともっと辛い体験、苦しい思いをしている人が沢山いるんだ。この状況を都合よくすりぬけることなんて出来ないのだ。
「よく闘ったものが、よく傷つく」
十分に傷ついて、行けるところまで行こうじゃないか・・・上等だ。
これまでだってボロボロだったんだから。

気がついたら8月になり、
雨も上がって夏の陽ざしが照りつけるようになっていた。
もうひと汗も、ふた汗もかいてみるべし。

「粘って粘って、
ねばるだけしか、武器はないのだ」

伊勢 真一